

イタリア, カッツァネッロ出土の三葉形建物

カッツァネッロの古代ローマ別荘遺跡発掘調査 1992年

A TREFOILED BUILDING FROM CAZZANELLO, ITALY

Preliminary report of the excavation of a Roman villa at Cazzanello 1992

伊藤重剛*, 渡辺道治**, 井上康孝***

Juko ITO, Michiharu WATANABE and Yasutaka INOUE

The excavation of a so-called 'Roman villa' near Tarquinia in central Italy was started in 1992. Prof. M. Aoyagi of Tokyo University is taking charge of whole excavation work. The site is ca. 50 m apart from the sea shore of Tyrrhenian Sea. In the season of 1992, approximately 200 m² was uncovered, and a trefoiled room of a building was discovered. The floor level of the building is ca. 1.4 m deep from the surface and the wall stands up around 1 m from the floor. Traces of mosaic were also found on the floor, but only fragments have remained. The date of the building is still vague, but most expectedly around from the 4th century A.D from the style of pottery.

Keywords : Tarquinia, Roman villa, trefoiled plan, apsidal wall, mosaic

タルクィニア, ローマ別荘, 三葉形平面, 半円形状の壁, モザイク

1. はじめに

ローマ時代の皇帝や貴族など富裕な階級の人々は、海岸や山地に別荘を造り、田舎の生活を楽んでいたことは各地に残る遺跡から知られている。このほど筆者らは、中部イタリアのタルクィニアのティレニア海岸にあるローマ時代の別荘と思われる遺跡の発掘調査（研究代表者 東京大学文学部 青柳正規教授, 調査期間1992年 8月10日～ 9月26日）に参加した。発掘結果の詳細については別途報告書を作製しているが¹⁾、西洋建築の起源となるローマ建築の遺構として重要であるので、建築学会の論文雑誌上に発掘の中間報告として概要を報告することとした。発掘では三葉形の建物遺構とともに陶器片を中心とする夥しい遺物が出土したが、本報告では建築遺構についてのみ報告する。また、本遺構のローマ建築史における位置づけについては現在発掘の途中であり、かつ文献により研究中であるので、ここでは出土遺構の客観的記述にとどめることとする。

2. 敷地と遺構の実測（図1）

調査場所はローマから北に約 100kmのタルクィニアの近郊カッツァネッロという農耕地帯にあり、海岸から約 50mの地点で、最近まで畑として使用されていた。敷地周辺には約 100m四方にわたって土器や瓦の断片が表面に出ており、以前からここに遺跡があることが分かっていた。1986年に行なわれた事前調査で幅 1mのトレンチが掘られ、コンクリートによる壁と床面が確認されている。調査地は平地であり、地表面下40cmまでが表土層であり、耕作地である。主要建物の床面は地表面下1.4 mの高さにあり、表土と床面の中間が主たる遺跡の層となっている。また建物の壁の上面はほぼ同じ高さで揃っている。

遺構の実測は光波測距儀を用い、現場で遺構の各点の3次元座標をとりデータレコーダーで記録した。採集したデータはその日の内にコンピュータ処理し、XYプロッターにより各点を打ち出し、翌日現場で遺構を見なが

* 熊本大学 助教授・工博

** 東京大学総合資料館客員研究員・工博

*** 熊本大学 大学院生

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.

Research Fellow, Museum of Tokyo University, Dr. Eng.

Graduate Student, Kumamoto University

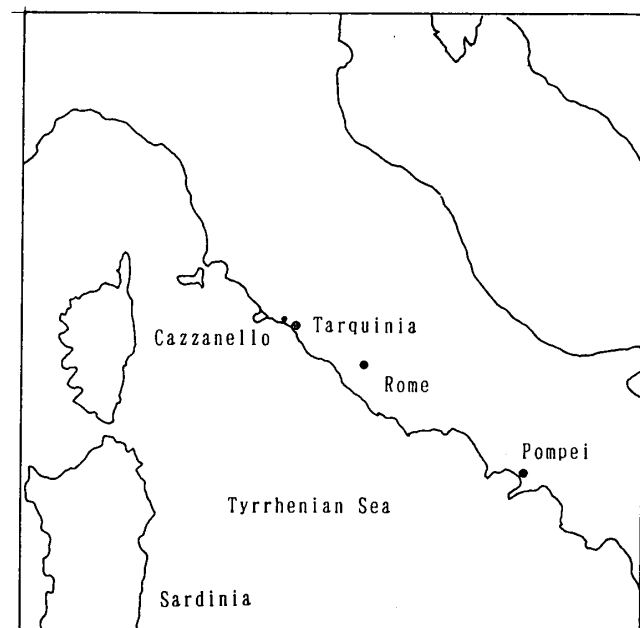


図1 カッツァネッロの地理的位置

ら各点を結び遺構の図面を作成した。ただし床面に関しては水系で2mのグリッドを作り、コンベックスを用いて実測した。

3. 三葉形の建物 (図2)

1) 概要

調査地はティレニア海の海岸に隣接した農地である。地表面下40cmまでが耕作された表土層で、主要建物の床面は地表面下1.4mの高さにある。したがって、表土と床面の中間が主たる遺跡の層となっており、建物の壁が立ち上がり、その上面はほぼ地表面下40cmの高さで揃っている。

発掘した主要遺構は三葉形をした左右対称のもので、発掘した8グリッドにはほぼおさまる。中央に矩形の広間があり、その三方にアプスが付いた形になっている。海岸に向かって開いた第4辺はアプスではなく矩形の部屋で、海岸の方から入ってくる時の前室の役割を果たしていたものと思われる。建物の中心軸線は磁北による南北軸から東に58°傾いており、建物の方位は海岸の方角を西とした。

建物の年代については、同種の他の建物と比較した上で考えなければならないが、出土遺物による編年からは、紀元4世紀ころに建てられたものと推定される。

2) 中央広間

中央広間は矩形の部屋で、現在は固いコンクリートの床となっている。この床仕上げ部分はほとんど剥がれ、その下地の痕跡が部屋の3カ所に残っている。1カ所は部屋の南側の隅を中心に数㎡に広がっており、一面に白い漆喰を含んだコンクリートが厚く積もっている。別の

1カ所は東アプスとの境目付近で、最初の床の下地と思われる小石や瓦の小断片を含んだいわゆるコチョペストの痕跡が認められる。これと一部重なり合うようにして、東側の隅から中央部にかけては、漆喰の混じった層が薄く断片的な状態で残っている。これらの床下地の相互関係はこれからの研究で明確にしなければならないが、どのような関係であったにせよ、これらの上に最終的な仕上げ面があったことが推測される。

この矩形の部屋の四隅には、長方形の緑色の大理石が置かれていた。西の隅のものは40cm×60cm、南の隅のものは40cm×80cmで、in-situの状態に残っている。周囲をコンクリートで固めてあるので、高さは正確には分からないものの、約20cmと思われる。北と東の隅には大理石自体は残っていないが、北の隅には大理石を設置するために煉瓦の断片などを平たく敷いた基礎が残っており、また、東の隅では大理石を固定するためにモルタルを流した痕跡があり、その中央部に数cm角の突起が残っていた。おそらく大理石の固定をより確実にするためのものと思われる。しかし大理石の上面には円柱のベースを置いた痕跡などは一切見られず、この石が何の目的のために設置されたのかは、現在のところまだ不明である。

この部屋には、このほか前身の建物のもと思われる古い壁と、その床に張られたものと思われるモザイクがところどころに断片的に残っている。部屋の西側の辺に沿った部分には、南北方向に幅約70cmの古いコンクリート壁(図中記号A、以下壁の痕跡は同様にアルファベットで示した。)の痕跡がある。この壁は床と同じ高さまでしか残存していないが、床もこの壁の縁で切れており、壁の上には床の痕跡は残っていない。またこの古壁の東側に沿って北の端から約6mにわたって70~80cm幅で床が帯状に陥没しており、その帯の中央部に向かってコンクリートの床が傾斜しヒビ割れが見られる。これらについては、後に前身の建物として詳述するので、ここでは現状についてのみ記述しておく。

3) 北アプス

北アプスと中央広間の間には、幅約45cmの古い壁(B)が床面から約10cmほど、敷居のように立ち上がっている。しかし上面の仕上げの痕跡は確認出来なかった。北アプスの奥には壁(B)と平行に、やはり幅50cmの古い壁(C)が立ち上がっている。また北アプスの西側の端にも、古壁(D)が中央広間からの古壁(A)がそのまま続く形で出土している。しかしながら、壁幅は若干狭くなっており壁(B)の下で繋がっているかどうかは不明であり、また奥の壁(C)と繋がっているかもまだ不明である。アプスの半円形の壁は、古壁(B)(C)(D)に直接の形で造られており、しかも入口の壁(B)の一部を利用しそこから半円が始まっている。こ

れらに囲まれた床は中央部を除き粗石で舗装されている。

北アプスの粗石による舗装とそれに伴う奥の壁はそのままアプスの壁の下を通り、北アプスの東側の部屋まで続いている。壁は途中で切れているものの粗石の舗装は全面に敷かれており、三葉形の建物ができる以前は、こ

こはひとつの空間であり、しかもこの舗装の状態からみると、屋外ではなかったか、つまり狭い路地あるいは細長い中庭だった可能性が考えられる。

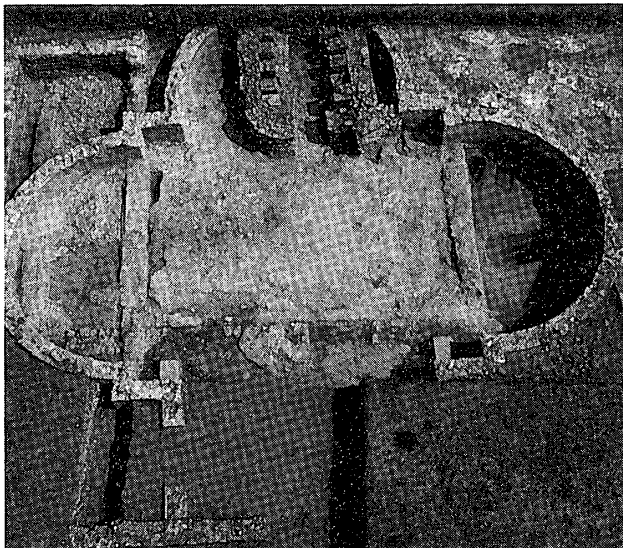


写真1 遺跡の全体写真



写真2 南アプス

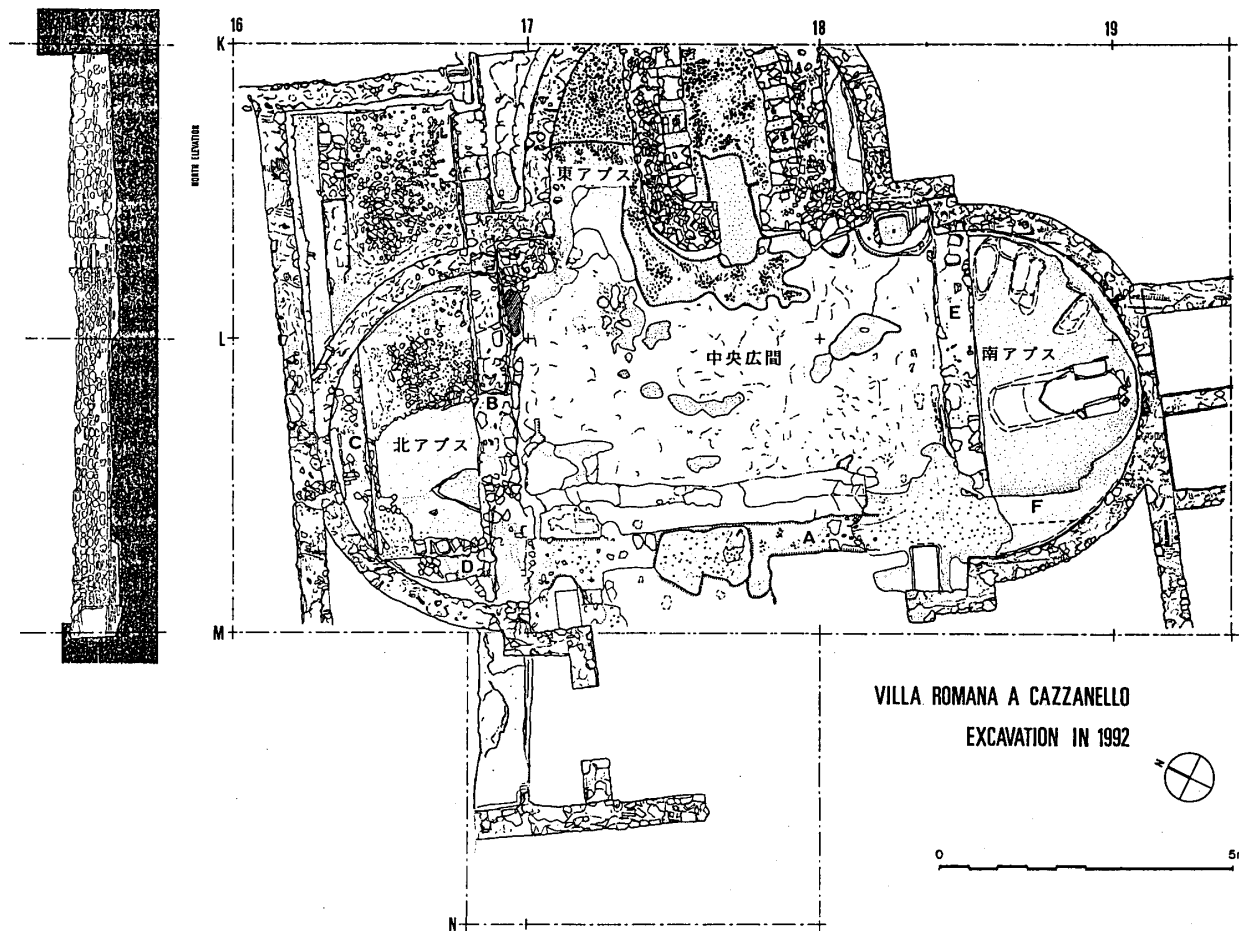


図2 遺構全体平面図・北側展開図

4) 東アプス

発掘した現状では東アプスの半分以上はカマドで占められている。カマドは煉瓦を粗雑に積み上げたもので約1mの高さまで残っている。床面から浮いた状態なので明らかに後の時代のものである。幅が3.5m奥行きはアプスの始まる場所から奥まで中央に幅約80cmの焚口がついている。内部は左右対称に櫛の葉状の構造になっており、上部はアーチとなっていたことが推測される。内部のレンガの色の状況からあまり温度が高くならなかったようだ。また遺物もほとんど残っていない。

床面については、2つの床面だけが確認できる。カマドの焚口周辺に最初の床のコチョペストが広がっているが、中央広間の2番目の床がそのままこのアプスを覆っている。しかし奥の部分は、さらにその上に数cm程度の大きさの瓦や石の小断片を用いたもうひとつのコチョペストで覆われているので、もうひとつ上に床面があったものと思われる。

5) 南アプス

南アプスの入口には北アプスと同様に古い壁(E)が敷居のように床面から約10cmほど立ち上がっている。また、アプスの西端には、北アプスと同じく中央広間の古壁(A)の延長上に古壁の痕跡らしきもの(F)が、床面より下に確認される。この壁の痕跡らしきものの上からアプス内壁にかけては、コンクリートの床が残っている。しかし中央部分ではコンクリート床の痕跡は失われ、アプス内壁に約5~10cmの幅で付着する形で残存しているのみである。この床については、この部分の上の土層は攪乱されていたことが確認されており、その際に破壊されたものと推測される。そして失われた床の下からは大小5基の炉の遺構が出土した。

6) 各部の主要寸法

光波測距儀による遺構の測量とは別に、各部の建築寸法を得るため巻尺(エスロンテープ)で測量して次の寸法を得た。

[中央広間]

内法幅(南北)	内法幅(東西)
7.459 m (東側)	6.701 m (北側)
7.489 m (西側)	6.584 m (南側)
7.474 m (平均)	6.643 m (平均)

[アプス]

内法幅	内法半径
5.568 m (北)	2.784 m (北)
5.531 m (南)	2.766 m (南)
5.379 m (東)	2.690 m (東)

壁厚については、各アプスについてそれぞれ2箇所ずつ合計6箇所計測したところ最小0.440m最大0.460m

で平均0.452mである。また中央広間の4隅で各4~5箇所、合計19箇所を実測したところ最小0.409m最大0.480m、平均0.445mとなった。

ローマ時代の尺度としては、現在1尺が約0.296mと推定されている。したがってこれで換算すると、中央広間の内法平均寸法が南北方向で25 1/4尺、東西方向で22 1/2尺、壁厚は1 1/2尺となるので、外法寸法でそれぞれ28 1/4尺、25 1/2尺となる。同じ寸法と思われる北アプスと南アプスの内法半径は9 7/8尺、東アプスこれらより少し小さく9 1/16尺となる。

7) 壁の施工と仕上げ

①施工法

壁は床面から約1mの高さまでほぼ一定して残っている。厚さは若干のばらつきはあるものの約45cmである。壁の施工法は石材や煉瓦を整層に積んだオプス・ミクストゥムのコンクリート壁で、石材は表面で長さ10数cm厚さ数cmの平たい野石、煉瓦は長さ約15cm厚さ3~5cmのものを用いている。ただし例えば中央広間の北隅のように整形の大きな石灰岩を用いて、隅部を補強している部分も見られる。煉瓦と石を比較すると、大方は石を用いているが、煉瓦は特定の層だけに用いられている。これはおそらく壁を施工するに当たって、壁のある高さのところで水平面を調整する必要があったためと思われる。例えば北アプスでは床面近くにこうした煉瓦の層があるが、壁を立ち上げるときの基準面としたか、あるいは床面の高さとしたものかと思われる。

②仕上げと内部意匠

壁の表面仕上げは残っていない。ただ南アプスからは白の地に赤および青緑で彩色された厚さ約2cmの漆喰の断片がいくつか出土している。彩色漆喰の壁は南アプスに接した部屋の壁の仕上げにも確認されているので、その壁が剥離したものとも思われる。また、三葉形の建物内部からは、床の上の堆積層から薄い色大理石の断片が多数出土している。これらはおそらく三葉形建物の壁あるいは床の仕上げに使われたものと推測される。またフルーティングのついた片蓋柱の断片と、同じく片蓋柱の柱頭の断片と思われるものが出土しており、内部の隅角部などには片蓋柱があったものと思われる。

平面から考えて、アプスの上部は半ドームの天井をもち外部は半円錐形の屋根があったろう。また年代と壁の厚さから考えて、中央広間の上部はドームではなく木造の方形の屋根であったろうと思われる。

4. 前身の建物

上述したように、三葉形の建物の下には古い壁の痕跡などが残っており、前身の建物があったことが判明している。ここであらためて、これらの古い壁にとまう前

身の建物の痕跡についてまとめ、三葉形建物との相互関係を考察する。

①モザイク

中央広間には、黒とややピンクを帯びた白の約1cm角の2種類のテッセラ（モザイク用の小石）を用いたモザイクの断片が床の10数箇所に残っており、中央広間の床面は、一時期モザイクで仕上げられていたことがうかがえる。中央広間の北と南の縁の部分では、テッセラを隣接する壁面に対して45°方向に傾けて張るという手法が見られる。残存状態から判断すると、この張り方は壁に沿って約40cmの幅で続いており、しかも東アプスの北側の狭い空間にも確認されている。

②中央広間内西側にある床とほぼ同高さの壁の痕跡

（記号A）

この部屋の西側の辺に沿った部分には、南北方向に幅約70cmの古いコンクリート壁（A）の痕跡がある。この壁は床と同じ高さまでしか残存していないが、床もこの壁の縁で切れており、壁の上には床の痕跡は残っていない。しかしながら、この壁の南端は、中央広間の南西隅部に広がっている漆喰を含む床下地の下に潜り込む形になっている。壁Aが壁Bと接する辺りではその輪郭が不明確になっており、壁Bとの関係はよく分からないが、現場で見た限り壁Bが壁Aを切っているように見受けられる。また壁Dと壁Fは、壁Aとほぼ一直線に並んでいるので、同時期かと思われる。

この壁に沿ってテッセラを45°に傾けて張った帯状のモザイク、つまり部屋の縁取りのためのモザイクは出土していない。このことは、この壁が現存するモザイクより以前の壁であった可能性が高い。またこの古壁の東側に沿って北の端から約6mにわたって70~80cm幅で床が帯状に陥没している。その帯の中央部に向かってコンクリートの床が傾斜しヒビ割れが見られるが、これはモザイク床を張ったとき、古壁の部分に比べてこの部分の下地が不安定であったため、帯状に陥没し、その後、古壁の上のモザイク床は破壊されたものと思われる。

③中央広間の北端と南端を区切る敷居状の壁の痕跡

（記号B, E）

古壁Bと古壁Eは明らかに、同時期のものであり、またモザイク床にともなうものと思われる。それはそれぞれの壁に沿って、テッセラを45°に傾斜して張ったモザイク床の痕跡があるからである。同様なモザイクは、東アプスのすぐ北側の小部屋からも出土しており、古壁Bと古壁Eに挟まれたモザイク床の部屋があり、それは東アプスのところまで続いていたことを暗示させる。

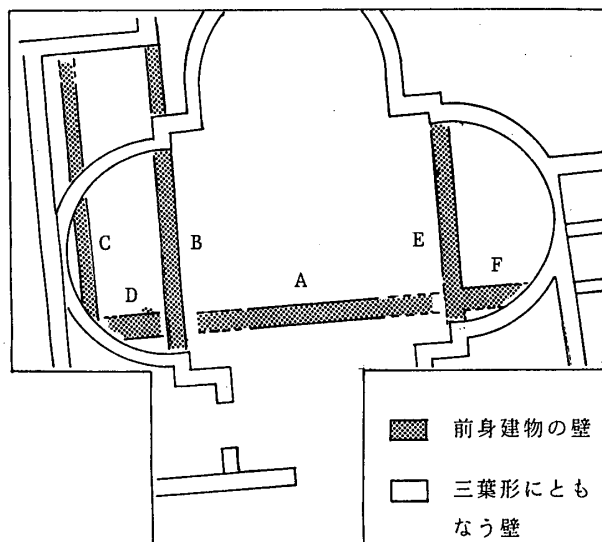


図3 壁体の模式図

④北アプス内の敷居状の壁（記号C, D）

古壁Cは北アプスの壁の下を潜り、北アプスの東の部屋（Vano 2）まで古壁Bと平行して続いており、しかもこの二つの壁の間には荒石の舗装が見られるので、年代的には同時に平行して存在していたものと推測される。

⑤南アプス内東側にある床面下の壁（記号F）

はっきりと壁とは断定できないが、古い壁らしい痕跡Fは、南アプスのコンクリート床面の下に残っており、その幅と深さも現在の段階では確認していない。

⑥古壁と三葉形建物との相互関係（図3）

モザイクの床は東アプスの北側にも見られ、その図柄が中央広間のものと共通しており、東アプスの半円形の壁がモザイクの床を切って建てられている。つまり、モザイク床が三葉形建物より古いということは明らかである。したがって、現在の遺構の状態からみた古い壁の全体像についてまとめてみると、おそらく次のように推測できるであろう。古壁Bと古壁Eに挟まれたモザイク床をもつ古い部屋が、三葉形の部屋の前身であり、古い部屋の上にはほぼそのまま載せる形で三葉形建物の中央広間および東アプスが出来ている。ただし、この古い部屋の東端と西端は、現在の段階ではまだ分からない。

また中央広間の中の西側よりに南北に横断する古壁Aは、これらの壁よりさらに古い可能性も考えられる。これらの遺構の年代については、現在遺物も含めて研究中なのでまだ断定はできないが、三葉形の建物に関しては出土する陶器の形式から紀元4世紀前後ではないかと思われる。今後、同種類の建物を調べ、また発掘をさらに拡張し周辺建物との関連の上で最終的な結論を得る必要がある。

5. 建築部材

発掘によって、片蓋柱やその柱頭、長押などいくつかの建築部材の断片が出土している。ほとんどは白大理石で、厚さが最大でも数cmの薄い部材であり、三葉形建物の内部表面を飾っていた建築部材と思われる。ここでは、その中からとくに重要だと思われるものについてのみ報告する。

①片蓋柱のコリント式柱頭（写真3，登録番号 9210001，9210002）

1986年の試掘によって出土した中央から右の部分、および1992年の発掘で出土した左の部分の、合計二つの断片から成る。これらの二つは破断面が完全に一致するので、同一部材のものと見て間違いはない。

柱頭の様式はコリント式で、そのアバクスは上に卵形削形、下に逆シーマの二段からなる。アバクス面は無装飾である。柱頭の中央に「鷲」の浮き彫りが配されている。「鷲」の頭部上端はアバクス上辺に一致している。「鷲」は幅が60mmほど、高さが70mmほどで柱頭全体の大きさに比較し、大きくもなく小さくもない。その体は正面を向き、頭部の表面は破損しているが、左に向いており、両翼を広げている。右側の翼が左側の其よりもわずかに上に高い位置に置かれている。広げた左右の翼は、その上部は鱗状に、その下は緩やかな円弧状にV字の溝を彫ることで表現されている。

左右の断片のそれぞれには、蔓巻きとアーカンサスの葉飾りの二段目の小葉の装飾がついている。蔓巻きはその頂部がアバクスの下辺に接しており、平坦な仕上げをなされている。蔓巻きの下端にはアーカンサスの小葉の上端が接しており、アーカンサスの小葉も蔓巻きもカラソスから浮き出るように明確な線で彫られている。アーカンサスの小葉は部分的に欠落しているものの、右側の断片では6枚、左側の部材では5枚が見える。小葉の先端は鋭く尖り、葉脈はV字形に深く彫り込まれ、所々では深い溝となっており、いわゆる「アジア型」の柱頭の特徴を示している。²¹⁾

アバクスの高さは約55mmである。ヴィトルヴィウスの比例論にしたがえば、柱頭全体の高さや柱の下部直径は385mm、柱の高さは3658mmと計算できる。

②イオニア式柱頭（写真4，登録番号 92-28-3，92-36-5）

イオニア式柱頭の右側渦巻き部分の一部。渦巻きの面と側面の一部が確認できる。渦巻きは左巻きでオクルス面は破損している。渦巻きの溝はゆるやかな円弧状の凹面となっているのに対し、稜の部分は平縁である。この平縁は同一面上で渦を巻いている。最も外側の渦巻きの溝の一部にアーカンサスの歯による装飾が部分的に見え

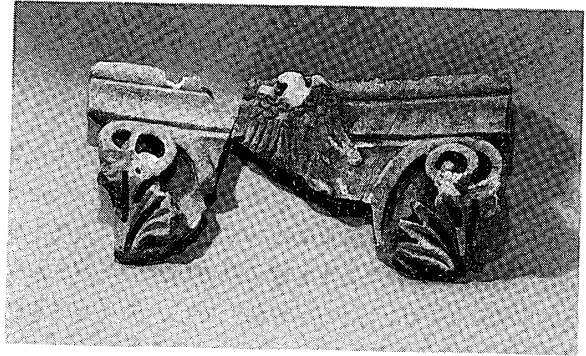


写真3 片蓋柱のコリント式柱頭

る。したがって、カナリスから渦巻き部分にかけて連続したアーカンサスの葉による装飾が施されていたと見られる。

側面の糸巻き部分は、中央部分でくびれるのではなく、逆に膨らむ形をしている。中央部のパルテウスは欠けている。糸巻き部分には、水平方向に幅広の葉が数枚一重一列に並んでおり、それぞれの葉はかなりの間隔を持っている。この葉の先端部は欠けているが、その端部の破損の様子から見て、其の葉先は渦巻き面近くでめくれあがったようになっていたと考えられる。

イオニア式柱頭は、首都ローマで紀元3～4世紀に流行した。³⁾ また渦巻き面に見られるアーカンサスの葉の彫りは極めて深く、渦巻きの平縁もその輪郭が鮮明に彫られているため、全体として陰影感の強い印象を与える。これらの点からみて、この柱頭は紀元3～4世紀のものと考えられる。



写真4 イオニア式柱頭の渦巻き

③角柱の一部（写真5，VRC92 0286）

上面と側面のひとつが当初の姿を残しているのみで、その他の面は欠けている。したがって、当初の長さ、幅、厚さは不明。上面、側面ともかなり磨耗している。上面には、縦溝と平坦な稜がそれぞれ4本見える。縦溝は緩やかな円弧をなし、幅21～24mm、深さ4mm、左から右に網状飾りが見え、其の端部は円弧状で終わる。平坦な稜は10mmほどである。側面には縦溝と平坦な稜がそれぞれ

3 本見えるが、磨耗が激しいため縦溝において網状飾りを確認できない。しかし、その形から見て、縦溝に網状飾りがあったと見て間違いない。上面の縦溝の網状飾りの配置からみて、角柱の下部の一部とみられる。また、同様な縦溝と平坦な稜の大きさや配置は、片蓋柱の一部 (VRC92 0232) にも見られ、同じ建築部分の一部をなしていたといえる。



写真5 角柱の一部

6. まとめ——ローマの三葉形建物

ローマ時代の他の三葉形建物の遺構については、現在文献によって詳しく調査中であり、いずれ別稿としてまとめる予定であるが、発掘調査の今後の展望を開くためにも、ここで最近の研究書に紹介されている三葉形建物のいくつかを示すこととする。ウォード・パーキンスによるローマ建築の通史によれば、⁴⁾ かなり規模の大きいものとして、ローマ郊外のチヴォリにあるハドリアヌスの別荘 (通称ヴィラ・アドリアーナ) の建物群の中に、三葉形をしたトリクリニウム (食堂、紀元3世紀) の建物がある。ポイキレと称される四方を柱廊で囲まれた中庭に附属するもので、中央広間、各アプスおよび前室の中に列柱を配した豪壮なものである。⁵⁾ シシリーで出土した豪華な別荘遺跡ピアッツァ・アルメリーナ (紀元4世紀初期 図4) にも、三葉形のトリクリニウムが見られる。これには前室がなく、中央広間と各アプスの境に2本ずつ柱が立っており、列柱の中庭に面していた。⁶⁾ イタリア北部のデセンツァノの別荘 (紀元4世紀、図5) は中央広間が約8m四方であり、今回発掘された遺構と規模がほぼ等しい。前室をもち、やはり中庭に面している。⁷⁾ クレスウェルは、ヨルダンのムシャタにあるウマイヤ朝の宮殿の三葉形平面との関係で、その起源を探っており、それによると三葉形平面はローマの廟墓建築を起源として、キリスト教の教会堂の附属建物などに使用されたとし、主な例として、アルジェリアのテベッサにあるバシリカに附属したマルティリウム (殉教者記念堂、紀元5世紀初頭、図6) などをはじめとして、シリアのボスラやエルサレムなどの例を挙げている。⁸⁾

これらはまだ資料の一部に過ぎないが、以上でみるかぎり、三葉形建物はローマ時代にトリクリニウムや廟墓として出現し、その後キリスト教の隆盛とともに、教会の施設のひとつとして使用され、さらにイスラム建築にまで用いられたことが分かる。⁹⁾ そして列柱をもつ中庭ないしホールに面して配置される場合が多いようだ。今後の発掘によって、タルクィニアの三葉形遺構の機能や形態について、これらと比較して、どのように位置づけられるのかを明らかにすることができるであろう。また同時に、三葉形建物が地中海の建築伝統の中でどのような役割を果たしてきたか、明らかにできるであろう。

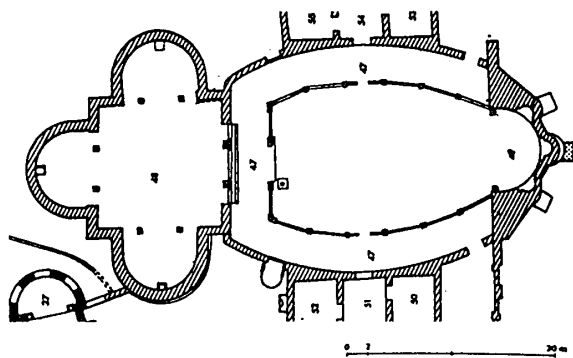


図4 ピアッツァ・アルメリーナのトリクリニウム

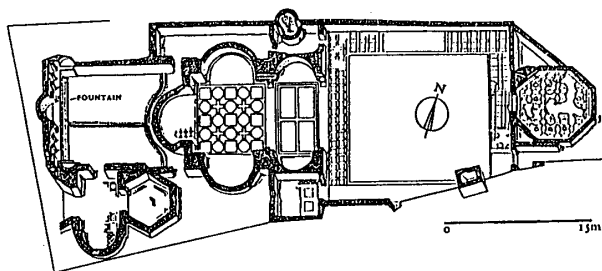


図5 デセンツァノの別荘

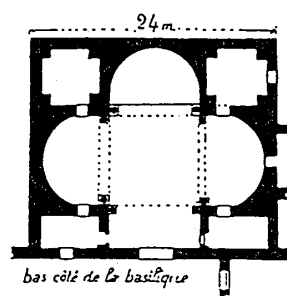


図6 テベッサ、バシリカのマルティリウム

注

- 1) 東京大学文学部文化交流施設紀要 第9号 平成5年を参照。
- 2) W. D. Heilmeyer "Korinthische Normal Kapitelle" Heidelberg, 1970, pp. 168-171; P. Pensubene, "I Capitelli" Roma, 1973, pp. 235-238.

- 3) D. E. Strong "some Early Examples of the Composit Capital"
Journal of Roman Study (JRS) 50, 1960, p.120.
- 4) Boethius, A. and Ward-Perkins, J.B. "Etruscan and Roman
Architecture" Hammondsworth, 1970,
- 5) *ibid.* pp.529-530.
- 6) *ibid.* p.533.
- 7) Creswell, K.A.C. "Early Muslim Architecture" vol.1, part 2,
Oxford, 1969, p.641.
- 8) *ibid.* pp.614-619.
- 9) *ibid.*

図版出典

図1 製図は井上による; 図2 Archaeologischer Anzeiger (AA)
66-67, 1954-55, p.547, Abb.42; 図3 Ward-Perkins, 前掲書
Fig.202; 図4 Creswell, 前掲書 Fig.668.

(1993年8月31日原稿受理, 1994年2月15日採用決定)
